

岩手食文化研究会

岩手食文化研究会便り

発行日 二〇一二年 七月十九日

編纂者 宮本 義孝 第二十号

岩手食文化研究会

八木澤商店 取締役会長・河野 和義氏

「東日本大震災から一年がたつて」を聴く

岩手県の沿岸市町村は、平成二十三年三月十一日、地震の後に発生した津波によって壊滅的な被害をこうむった。

その状況の一つひとつが新聞やテレビで明らかにされるにつれ、被災地で生活している知人、友人のことが気になってきた。

けれど現地は混乱したまま、電話は通じないし、手紙も届かない。数日間、ただ悶々として過ごした。しかしそれは埒があかない。取りあえず気に掛かる人たちを書き出し、一覧表にしてみた。全部で二十七名いた。それからその表を同封し、県内在住の知り合いに手紙を書いた。

「この人たちの情報かもし身にいらつていたらお知らせ下さい」

手紙は二十通、三十通とまとまること、近くの郵便局に持っていった。全部で百二通になった。

そして、三月二二日、最後の二十通を出しに行つたら、「ガソリン不足で車が動かないから小包はまた無理ですが、手紙は間もなく受けつけるようになります」と、局員が教えてくれた。

「津波で家の無くなった人もいるんじゃないですか」と聞くと、避難所を廻つても探して届ける、との返事に、そのまま家に戻つて、前もつて用意してあつた見舞文に、安否確認の用紙と返信用封筒を入れて、また郵便局に行つた。

それで、いろいろな情報が手元に届くようになった。

中には亡くなった人もいた。

「今頃は太平洋に浮いているか沈んでいるか、でしよう」
大学時代の後輩は妹さんから連絡があつた。教育新聞社に勤め、定年後、郷里の大槌に戻つて来、これからは毎日、好き嫌いを眺め、好きな絵を描いて暮せる、と言つていた。そうだった。

「五十年間、生活した家を、津波は、思い出さざらつていってしまいました」と書いてよこした人もいた。

「家は高台だったので津波の被害はまぬがれました。今は、

土・日ごと、避難所にいる親戚、友人を夕食に招いて、風呂を使ってもらっています」と知らせてきた人もいる。

そうやって少しずつ知人、友人たちの様子が判ってきたのだが、その中で、河野さんの情報だけがなかなか入ってこなかった。

我家と同じ町内に、実家が陸前高田だと云う御婦人がいる。両親のことが心配で、地震のあった翌日、自動車で実家に向かったそうだった。幸いご両親は無事だった。その方に妻から河野さんのことを聞いてもらった。

「八木澤商店ですか。駄目だと思います。あの辺りは完全に破壊され、まともな家など一軒もありません」と云う返事だった。

その後、友人たちと電話で連絡を取りあった時も、河野さんの名前を出してみたのだが、いずれも似たような返事だった。

それから数日して、ひょっとして駄目だったのかもしれない。そう思いかけた時、まったくひょんなことから河野さんの消息が判った。

テレビはNHKを付けっぱなしにしていたのだが、その時、何を思ったのか、チャンネルを民放に替えた。

画面に小型のトラックが映れ出され、それに若い男の人が乗り込むところだった。それは、波に押し戻されたが、海岸の瓦礫の中に大きな金庫があって、どうやら、八木澤商店のものらしい、そんな話を聞いて確認のため出掛けるところだったのだ。その男性が、河野さんの息子さんだった。

その時の、アナウンサーとの遣り取りで、八木澤商店は従業員一人に犠牲者を出したものの、あとは皆、無事だった、ということを知った。

すると不思議なことに、それから河野さんの情報が次々と入るようになった。

四月一日、NHKテレビニュースに八木澤商店を扱った報道があった。二日には「老舗しょうゆ店 再出発」と云う見出しで、読売新聞にも記事が載った。

それにしても、四十人ほどいる従業員ほとんどが無事だったとは、改めて、奇蹟のように感じた。

八木澤商店が在る今泉地区は、明治二九年、昭和八年の三陸大津波、昭和三五年の子り地震でも、津波は届かなかった所だ。過去の事実に甘えず、日頃からよほど気を引き締め、気持を一つにしていないと、こうはいかなかったと思った。

しかも咄嗟の判断で、避難場所に指定されている建物よりも更に高い山の方に逃げたという。

なお、亡くなった方というのは、無事に皆が避難しおえたのを確認した後、消防団の一員として水門閉鎖のため防潮堤に戻った男性の従業員だったそう。

後にぼつて聞いたのだが、大地震が発生した時、河野さんは仕事で上京していたという。

帰りの新幹線は上野を少し出た所で停ってしまった。地震後、押し寄せた津波で、東北の太平洋沿岸は大惨事になっていることを、河野さんは東京で知った。それから三日かけて陸前高田に戻ってきたのだが、帰ってみると、住み馴れた街は跡のたもびく消えていた。

岩手食文化研究会の特別講演会に河野さんをお呼びし話を伺いたいということは、昨年から出ていた。それで依頼の手紙や電話を掛けたのだが、その時は八木澤商店が再出発に向けて大変忙しくしていた時でもあり、実現しなかった。

それから一年がたち、今、八木澤商店は、元の活気を取り戻しつつある。

この一年、未曾有の惨事と向き合い、河野さんは何を考え何を支えに生きてこられたか、そんな話を、ようやく聴ける

ようになった。

二

平成二十四年六月二十四日、アイーナ、会議室501Aで行われた岩手食文化研究会の特別講演会は「東日本大震災から一年がたって」と題し、八木澤商店取締役会長、河野和義さんの話だった。

二時間ほどの内容だったが、河野さんの頭の中には我々に取り次ぎたい体験がいっぱいあるようで、事例が次から次へと出てくる。けれど、どの話も、人と人との心の触れ合いと感動が核になっているので、ご本人が、支離滅裂と謙遜して言うような印象は全然受けなかった。

まず、話に先立って八分間ほど、広田湾からと気仙川を遡って押し寄せてくる津波の映像を見た。画面には渦巻く波に押し上げられ翻弄され、建物の呑込まれていく様子が、松林越しに映し出されている。それが河野さんの八木澤商店だった。

この津波によって、文化四年（一八〇七）創業の、そして、これまで三回にわたって全国醤油品評会で農林水産大臣賞を受賞した八木澤商店の、蔵造りの製造工場、店舗、自宅が全壊し流失したのだ。わずか、六分間の出来事だった。

この映像を見ていて、もう十年以上も前のことだが、初めて八木澤商店に行った時のことを思い出した。

あの時、葺造りの店舗に入って不思議に思ったことは、奥の、製品を並べてある棚の上の梁に、徳利とか皿だとか、落ちれば壊れそう^な物が置いてあるのだった。

そのことを尋ねたら、八木澤商店の建物は、気仙大工の造ったものだが、気仙大工は柱を組む時、凶面も引かず、釘も使わないそう^だ。大きく育った木にはそれぞれ癖があつて、今のように木を凶面に合わせて削るのではなく、むしろ、木の癖をそのまま活かして使う。また木をつなぐ時は、釘ではなく、木工細工の木組みのように、木に木を嵌込んでつなぐ、そう^{する}ことで、地震が来た時など、木は木に噛合つて互いを強固にし、建物が揺れて動くということはないのだ^と思った。実際、昭和五三年の宮城県沖地震や、その後、屢々見舞われた地震でも、梁の上の物が落ちて壊れた例は一度もなかった^{という話}だった。

また、工場になつて^{いる}葺の壁には小窓が嵌込まれていて、扉を開くと、二、三十センチもある厚い土壁に幾筋もの層が見える。これは、塗つては乾かし、また塗つて、と云う作業の跡で、昔の葺は、こつやつて数年をかけて完成させたもの

なのだ^とそう^だ。

そう説明する河野さんの顔には、先人への憧れと、文化を受け継ぐ者の誇りのような輝きを感じられた。

そんな建物のすべてが一瞬にしてなくなつてしまったのだ。どんなにか、無念^だつたらう^か、と思われる。

河野さんの話は、例えが多く具体的に、またほどよく笑いを交えて、聴く者を飽きさせない。

けれど今回の話はこれまでと違つて、内に静謐な感じがあるように思った。内容が、大震災^だつた^{から}かもしれない。一方、この一年間で、人生を何増倍もに凝縮して生きて来たの、たどりついた悟りのような境地であるかもしれない。

そんな話の中で、最も心に残つたもの一つを紹介する。

「余所^でばら^{また}し^も、県内^でそんな話はするな、と家族が固く戒められて^{いる}んだけど……」と、前置きして、河野さんは次のような話をした。

「今、私は、大震災に遭つて良かったんではないか、と思つている」

これは河野さん特有の逆説的な物言^だが、聴いていて、案外、本音であるかもしれない、と思つた。

津波によつて陸前高田のほとんどが壊滅した時、逸早く、

トラック三台に積んだ野菜や食料品が、宮崎県の仲間たちから届けられたそう。それを多分けて避難所に運び、皆に感謝され、それが却って河野さんらの励ましになった。

又、食料を受け取る時も列をつくって割り込むことはなく、高台にたつて家が無事だった人は、流失した人たちを先に連れていっても後から受け取っていたとのこと。

そういう人の善意や心根のやさしさに触れるたび、逆に、ありがたう、との思いを強くしていったそう。

そして宮崎県の仲間と同じような励ましや援助は今も全国各地からつづいていて、その事へのお礼を兼ねて、呼ばれて出掛けた河野さんの講演は、この一年間で六十ヶ所にもものほつているという。

更に、醸造業者にとって、工場に住みついている酵母菌は何にもまして替え難き存在だが、津波で工場を失った河野さんに、これまで品評会でいつも製薬品の一、二を競っていた、秋田県の某醸造会社から一年分の醗もろみが届けられたという。「人は、どうしてこんなにやさしいのだろう」

震災に遭って改めて人とのつばかりが有難く感じられ、それがこの一年間、河野さんの心を支えつづけたよう。

勿論、これらは嘗って人たちが逆境に立たされた時、河野

さんから受けた励ましや支援に対して精いっぱい恩返しではあるのだが……。

もう一つ、河野さんが震災に遭って良かったと感じたのは、多少変な言い方だが、息子さんの発見、ではなかったかと思う。

「八木澤兩店の復興はこれから長くつづく。親爺の歳では、とてもむずかしい。これから社長は俺がやる」。息子さんはそう言ったそう。

陸前高田の惨状を目の当りにして、河野さんは、これで八木澤兩店は終わった、と感じたという。けれど息子さんは、未来に希望をつないでいる。ただ歳が若いからだけではい

「今、従業員らは、命が助かっただけでも、と気を張りつめて生きている。けれど時間がたち落ちついたら、今度は絶望が襲ってくる。そんな時、働く場さえ確保されていれば、何とかそれを乗り越えられる。だから仕事を簡単に投げ出すわけにはいかないんだ」

息子さんの眼は、もつと先を見つめている。

そして息子さんとこれからのことを話し合う内、河野さんは、大切なものを津波が全部持って行ってしまった、と思っていたが、必ずしもそうではなかったと気づく。

「八木澤商店の、人材や技術や伝統までは持っていかねた。」

次第に河野さん自身も強くされていく。

そんな話の中で、思い出したように河野さんは、「女は強い、だけど男は、やっぱり駄目だなあ」と、溜息混じりに呟いた。

奥さんのことだ。これまでは、「男はロマン、女は不満」と

言いながら、「全国太鼓フェスティバル」など、陸前高田の街づくりを精を出す河野の勝手を許し陰で支えつづけてきた奥さんが、この惨事を悪知一つこぼさず受け入れ、今必ずべき自分の仕事を淡々とこなしている。そんな姿を見て、落ち込んだりいじけたりしていた自分が、恥しく感じられ、こんなことでぐずぐずばんかしてはいられない、と思うようになったという。

息子さんは社長に就任すると、従業員たちを招集し、まず給料を支払い、これから苦難に立ち向かう八木澤商店の決意を伝える。更に、採用内定者である高校生二名にも、トラック二台しか残っていないこんな会社だけど、来て働く気があるかと、意気を確認している。

その時の様子は、四月一日のテレビニュースにも映しだされてきたが、従業員たちの緊張していた表情が次第に崩れて

笑顔に変わっていくのが印象的だった。

又、半年ほどたったニュースでも、出張販売所で働く、その時の二人の高校生が映っていたが、

「こつやって働くことで、郷里の復興のために自分も参加していると思えるのは、とても幸せなことですよ」と、顔を明るくして語っていた。

九代目社長になつた息子さんは、その後、思いもよらぬ経営手腕を發揮する。

再建のためには、まず資金を調達しなければならぬ。

「私には考えつかないことだが、ファンドだそうだが」

これは、「セキユリテ被災地応援ファンド」と云つて、一口が一万五百円。被災地の企業十六社から出資者に「社を選ばせ、特典つきで、半分は寄付、半分は投資で応援してもらう」というものだ。

「窮すれば、人間はいろんなことを考えるもんだね」

仲間同志、互いに手を組み、アイデアを出しあい、それを実行に移していく。まるで仕事を楽しんでるよつば、若い経営者のやり方を、河野さんは半ば驚き半ば羨ましげに見ているような口振りだった。

こういつつ次世代の成長も、震災の大惨事から生まれたもの

だと感じていたようだった。

「この間、能優の林隆三に会った時、後継者をはっきりさせたことが一番の手柄だと褒められた」

確かに、九代目ははっきりさせることによって、顧客も従業員はかりでなく、資金を出資するにしても、安心してお金を貸せる。

ただ、河野さんにはこれまで築いてきた、人との絆がある。八木澤商店を押し進めるには、河野さんかしなければならぬ。いことはまだまだ山ほどある。

最後に話の締め括りとして、河野さんは北海道へ講演に行った時、たまたま目にしたという、「士幌町中央中学校 生徒憲章」を示した。この憲章に流れている、人間の人間に対する思いが、震災後、一年を経て行きついた、河野さんの思いに重なっていると感じたからであろう。

「私には、幸い家族は甚無事だったからそう言えるんだけど、被災地では、大切な人を失って、今も心の傷ついた人がたくさんいる。やっぱり、震災に遭って良かったなんて、軽々しく言っちゃいけないだね」

話し終った後、挨拶に来た人たちと立ち話をしている中から、河野さんの声が出た。良かった、と言いつつ、本当の

ところでは、罹災した人たちの方に心は向いているのだ、と思った。

懇親会にも声を掛けていたのだが、講演会が終わると直ぐ、河野さんは帰っていかれた。もう一つ講演があつて、明日は熊本に出掛けなければならぬのだという。

アイーナの正面入口まで河野さんを送っていった。エレベーターの中で河野さんは、こんな話をした。

「陸前高田に戻って、今度、造る工場は、自前で電気がまかなえるようにしたいと考えています」

「福島の人たちの無念を思うと、原発は駄目ですね。そう思ったなら実践しなきゃ」

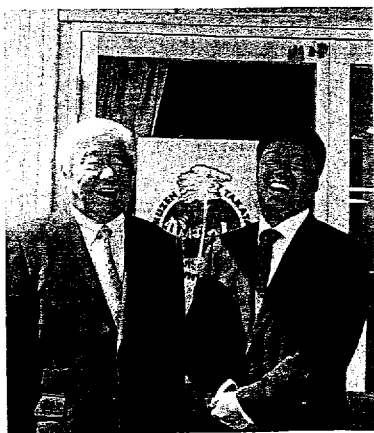
「津波は、これまでの八木澤商店の皆をさらっていったから、今度は何でも自由に発想できる」

そんな河野さんの話を聞きながら、

「女性には不満がモレれ

ないが、男はやっぱりロマンだなあ。ロマンに生きて、男は美しいんだ」

と思った。



8代目(左)と9代目

士幌町中央中学校 生徒憲章

一九九六年三月十五日制定

人權の章

人間だから
わたしの生命も心もたった一つ
かけがえないひとりとして
大切にされる
あなたも人間だから
わたしはあなたを大切にす

自主の章

人間だから
わたしはわたしの意思をもつ
自ら創りあげる喜び
やりとげる責任とともに
ひとりの人間だから
わたしもあなたも自分で立てる

民主の章

人間だから
わたしはあなたと違う
たがいを認め、そして話しあう
違う人間だけれど平等であるために
だれもが人間だから
わたしとあなたは支えあえる

希望の章

人間だから
わたしはわたしを高めていける
真実を求め
豊かな心を育てる
わたしたちは人間だから
夢に向かってともに歩く